

Die Eiche

ディ アイヘ
http://www.jdg-chiba.com

Japanisch-Deutsche
Gesellschaft der Präfektur
Chiba

〒270-2214 松戸市松飛台556-12
Tel./Fax: 047-385-1456

Mail: info@jdg-chiba.com



協会Home Page

平尾 浩三 名誉会長を悼む

3月20日（水）の夕方、奥様から平尾浩三名誉会長が3月3日に亡くなられたとのお知らせをいただきました。あまりに突然のことに驚き、誠に痛恨の極みです。

平尾名誉会長は、現役会長のままお亡くなりになられた加藤吉昭会

長の後を引き継ぎ、2001年9月から会長にご就任。爾来2010年4月まで約10年近くの長きにわたり会長を務められ、御退任後は名誉会長として、当協会が今日ある礎を築かれました。

平尾先生は、1934年に神戸市でお生まれになり、1957年東京大学教養学部教養学科（ドイツ分科）をご卒業。その後西ドイツに渡られ、ご専門の中高ドイツ語のご研究に従事されるとともに、ハンブルク大学、フライブルク大学の日本語講師として教鞭もとられました。1965年にご帰国後は、中央大学文学部助教授、1969年から東京大学教養学部助教授、のちに教授に昇任されました。1989年に同大学をご退官後は、慶應義塾大学文学部教授、2000年から2005年まで日本橋学館大学教授を務められました。

先生は多年にわたり教育と研究に情熱を注がただけでなく、日本独文学会理事長、ドイツ語学文学振興協会理事長等を務められ、学界の第一人者として、我が国のドイツ語・ドイツ文学の発展に多大のご功績を残されました。1982年と1990年に日本翻訳文化賞、2004年に日本独文学会賞も受賞されておられます。先生は、長年NHKのラジオドイツ語講座講師も務められましたので、先生からドイツ語の手ほどきを受けた方も数多くおられると思います。

そうしたたいへんご多忙な中、先生は会長にご就任下さり、会長のリーダーシップのもとで、毎年恒例の秋のドイツ軍人慰霊祭の挙行をはじめとして、さまざまな分野の方々をお招きしての文化講演会等々、多彩な行事をつつがなく、好評のもとに実施することができました。会長ご自身も3回シリーズ「ドイツ文学読書会」の講師も務めてくださいました。短歌に造詣の深い平尾会長から、講演「短歌にみる9.11」をお伺いしたことも強く印象に残っています。ワインの楽しいお話もたくさんお聞かせくださいました。

2005年3月には、先生の長年にわたる日独文化交流のご功績に

対し、ドイツ連邦共和国政府から「一等功労十字勲章」が授与されたことは、われわれ会員にとってもたいへん誇らしいことでした。

2005年は、千葉県とデュッセルドルフ市との間で相互交流協定が締結され、同年5月には、当時の堂本暁子千葉県知事のデュッセルドルフ日本デー参加に焦点を合わせて、平尾会長以下21名でドイツ視察・研修旅行に参りました。ジャパンデーはあいにくの雨で中止となりましたが、その後、行く先々で平尾会長の含蓄あるご説明をお聞きしながら、楽しい思い出深い旅行ができましたことを、今更ながら感謝申し上げます。この年の10月には、千葉大学と共催で、「ドイツに親しむ3日間」を挙行政し、当協会の活動に画期的な足跡を残すことが出来ました。これも平尾会長のもとに会員が結集した結果の賜物であつたと存じます。

さらに2006年6月には当協会、(財)日独協会、OAG(ドイツ東洋文化研究協会)三者共催による一連の行事の中で、東映映画の大作シリーズ第2弾『バルトの楽園』の出目監督と平尾会長との対談もありました。その年の10月には、千葉県日独協会創立10周年記念式典が多くの参加者を得て、成功裏に行われましたこともつい昨日のように思い出されます。

2009年4月には、全国日独協会連合会の委託を受け当協会が主管協会となり、全国日独協会連合会総会が幕張メッセ国際会議場において盛大に開催されましたことも、記憶に新しいところです。これもひとえに平尾会長を中心に、当協会会員の皆様が共に力を合わせての結果でした。

このほかにも、思い出は尽きるところがありません。会長を退かれた後も時々、「金谷さん、お元気ですか？」としばしばお電話をいただきました。そのお声ももうお聞きすることが出来なくなり、本当に寂しい限りです。

ここに千葉県日独協会を代表して、平尾名誉会長の御逝去に接し謹んで弔意を表し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

千葉県日独協会 会長 金谷 誠一郎

Die Eiche No.50 (2007.8.1) での平尾名誉会長の寄稿記事

『ドイツ文学読書会』(第三シリーズ)を終えて
千葉県日独協会会長 平尾 浩三

七週に亘る「ドイツ文学読書会」(第三シリーズ)が、今回のテーマは「中世文化」でした。

およそ「中世ヨーロッパ」とは何なのでしょう？ 私たちが今それに注目することの意味は、どこにあるのでしょうか？

かつて「暗黒時代」と呼ばれたヨーロッパ中世、また「中世」の光の中で人びとの憧れの彼方に美しく浮かび上がったヨーロッパ中世、明るくさまよった色調で見られてきた中世ヨーロッパですが、いずれにせよ、「ヨーロッパ世界」というものの歴史を覆った時代が「中世」であったという考え方は、今日ではほぼ定着していると言えよう。そして私たち日本人がヨーロッパを考へる時、ヨーロッパを旅する時、たずさる「中世」に思いを誘われる理由も、そこにあるのではないだろうか。

二十一世紀、いつ果てるとも知れぬ宗教・民族・国家間の対立、血みどろの戦い、貧困・格差・汚染・無気力・心の荒廃……思ふに、この世をいかに深くめぐるか、二十一世紀に生きて、私たちは絶望に陥るか、それでもより良き未来を描くか、私たちが求めらるべき影響なき生活形態を思い描くことが私たちには困難とは思せず、近代以後の欧米世界が人類進歩の最高のものという考え方の正当性を、私たちはかつてなきほどに深く疑わざるを得ません。その時にあつて、私たちは長いヨーロッパ史の原点にまで視線を投げ返し、ヨーロッパ史の意味を、もう一度根本から考え直そうとするのでしよう。

テキストは「十二世紀の詩人スエーデン・ミエ作『Die Eiche』」ですが、この催しと同時にドイツ語運用力養成のプラスにもなることを願ひ、教室ではその現代ドイツ語訳を用いました。日本語題名「『中世の騎士』」同様に、現代ドイツ語の参考文例が多数挙げられているので、多角的なドイツ語練習にも役立つかと存じます。

幹事の館野様、水野様、布施様をはじめ、皆様の積極的なご協力に心から感謝致します。

新春講演会 草本先生講演報告

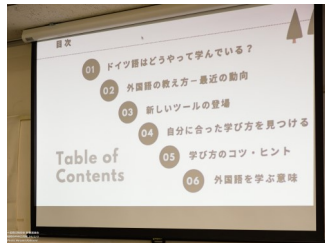
- 常任理事/青壮年部長 勝見 浩明-

2月3日船橋中央公民館にて新春講演会が開催されました。今年の新春講演会のタイトルは、「ドイツ語学習の動向とコツ」です。講師は、当協会会員で麗澤大学で教鞭を取っておられる草本 晶先生です。

本テーマは、青壮年部ドイツ語/ドイツ文化研究の一つとして草本先生がフォーカスされているドイツ語教育について新春講演会の場にて紹介くださいました。本公演会に先立ち、Die Eiche No.146においてその概要を執筆くださいました。

興味深かったのは、最新のドイツ語学習においては、特定のシーンにおけるドイツ語学習、グループによる共同学習による効率的な学習にシフトしているということでした。

また、外国語を学ぶ上での10原則が紹介され、1.本物の教材を使う。2.わからないところは放っておく。3.言語化する（目に見えるものはすべて言語化）。4.言い換える（わかりやすく説明してみる）。5.文脈や流れを見極める。6.身体を動かす。7.辞書をこまめに引く。8.日常生活に取り入れる（つばやきもドイツ語で）。9.間違えることは、チャンス！ 10.一緒に勉強する人を見つける（互いにチェック、アイデア発見）。が説明されました。ネット上にあるドイツ語学習教材も紹介いただきました。参加者からは、多くの質問が寄せられました。



その後、懇親会が「今日和」で行われ、講演内容の余韻を残しつつ、会員によるとても楽しい懇親を行うことができました。



2024年度全国日独協会連合会 総会に出席して

- 副会長 木戸 裕-

2024年度全国日独協会連合会総会が、4月19日（金）、20日（土）の両日、鳴門市で開催され、出席してまいりました。以下、その概要をご報告させていただきます。

総会1日目（4月19日）は、鳴門市ドイツ館大会議室で開かれました。鳴門市独友好協会・村澤由利子会長の開会宣言にはじまり、両国国歌演奏、東原敏昭会長、クレーメン・フォン・ゲツツェ駐日ドイツ大使、メラニー・ザクシンガードイツ総領事、後藤田正純徳島県知事、泉理彦鳴門市市長、カール・シュ・リュネブルク市長（ビデオメッセージ）のご挨拶のあと、決議事項審議と報告事項審議に入りました。



シュタンツェル会長

決議事項では、東原会長の再任、監事2名（志賀久徳・千葉県日独協会常任理事、茨城県日独文化協会・野澤正義氏）の再任が承認されました。続いて、2023年度決算（案）の説明と監査報告、2024年度予算（案）の説明があり、いずれも異議なく承認されました。なお、八戸日独協会会長から解散・退会の届け出が提出されていることが報告され、承認されました。また、ぐんま日独協会・鈴木克彬会長ほか全9名の方々が引き続き連合会の副会長を務められる旨の報告がありました。

引き続き、各地日独協会の活動報告に入りました。私からは、以下のような趣旨の報告をいたしました。

千葉県日独協会はその創設にあたり、ドイツ人俘虜収容所と大きく関わっている。習志野市にも、第一次世界大戦中、中国で捕虜となったドイツ人兵士を収容した俘虜収容所があった。千葉県日独協会は、毎年11月のドイツ「国民哀悼の日」に収容所で亡くなったドイツ人兵士の慰霊祭を開催することを目的の一つとして1996年に設立されたという経緯をもっている。大使、大使館付武官をはじめ、県、市の代表、陸上自衛隊習志野駐屯地司令にもご参列いただき、創設以来欠かすことなく慰霊祭を実施してきた。ビール祭りなど、楽しい多彩な懇親を深める活動も行っている。文化講演会、ドイツ語講習会などは、オンラインを使って、会員だけでなく、全国からどなたでもご参加できるようにしており、幸い好評を得ている。俘虜となったドイツ兵の残した日記や当時の記録などを発掘、紹介することなども会員同士の研究会で行ってきた。当協会の活動の詳細については、ホームページもご覧いただけると幸いです。

最後に、本年10月にベルリンで開催される「日独パートナーシップデー」について、フォルカー・シュタンツェル独日協会連合会会長、ユリア・ミュンヒ独日協会連合会理事/ベルリン独日センター事務総長から説明がありました。なお、現在ドイツ留学中の大野巨児・当協会理事は、現在ベルリン日独センターにおいてインターン中で、この催しの裏方を務めておられます。

総会、終了後は、時間を忘れる盛大な懇親会が行われました。

第2日目（4月20日）は、午前中は、鳴門市ドイツ館見学、コンサート、講演会がありました。村澤由利子鳴門市独友好協会会長と歌手井上ゆかりさんの素晴らしい演奏とソプラノに、皆さんから喝采の拍手が鳴りやみませんでした。講演会は「徳島の中のドイツー慰霊碑に導かれた日独交流ー」という演題で、森清治鳴門市ドイツ館長がたいへん興味深いお話をあかせくださいました。午後は、ドイツ村公園にてドイツ兵士慰霊碑への献花が行われました。



ドイツ兵慰霊碑への献花

鳴門市、鳴門市独友好協会、連合会が、一致協力し、たいへん充実した内容でした。また後藤田知事、泉鳴門市市長も力を入れ、市の職員も全面的にお手伝いにあっていたのが印象的でした。

個人としては、今回鳴門で、フォルカー・シュタンツェル独日協会会長とお会いでき、お話しできたのはたいへんうれしいことでした。

その一方で、担い手がいなくなり、維持できなくなったのは致し方がないことかもしれませんが、八戸日独協会が幕を閉じられたことは、たいへん残念なことでした。

●写真を提供くださった大久保明・湘南日独協会名誉会長と、安藤喜美子様に御礼申し上げます。

陸軍将校としてドイツ連邦軍へ



ドイツと私

ドイツと私 - 田中 重伸

陸軍将校になってドイツに行くこと。これは私が小学生の頃に抱いた夢であり、人生の目標でありました。その頃からJTBの前身である日本交通公社のドイツ語会話集を買い、NHKラジオのドイツ語講座を聞きながら、ずっと独学でドイツ語を学んできました。その夢がかない、36歳の時に陸上自衛官としてドイツ連邦軍に留学することができました。

留学当初は、各国将校とともに軍事用語も含めたドイツ語の勉強です。語学試験に合格すると、ハンブルクにあるドイツ連邦軍指揮大学で学ぶことができます。このコースは、1962年から続く、将校のための国際課程教育です。軍人教官、市民教官に部外講師も加わり、戦略、作戦、戦術、統率、装備等を学びます。例えば戦術では、任務、地域、敵情、使える部隊が与えられて、戦い方を議論します。地図上で、そして現地へ赴いて、最良の方針を案出することが課題です。国の体制が違っても戦いの原理は同じなのか。興味津々の議論を記憶しています。

校外においても幅広くドイツ全般を学ぶ機会がありました。議会政治、企業、文化や歴史の地を訪問し、ドイツ人のものごとの考え方にも深く触れることができました。政治、外交、ビジネス、文化の著名人が、私たち留学生のために開いてくれる親睦会も多々ありました。これらは、連邦軍にとっても、国際的な相互理解につなげていく重要なカリキュラムの一つです。ここに派遣され、学んだ将校たちは、それぞれの国の安全保障中枢に戻って行くのですから。

週末は、家族と欧州中を旅して回りました。観光地だけでなく、かつての戦場にも多々足を運び、戦史に地形を重ねて学ぶなど公私にわたり充実した留学生活でした。

課程修了から15年、再び指揮大学を訪れる機会を得ました。課程修了者で将官となった留学生が、その年の課程修了式に招かれ、卒業生の前でスピーチするという人選に選ばれたのです。私は、ドイツ語を始めたあの会話集を持参して卒業生に示しながら、道を選ぶ志し、ともに学んだ仲間が存在、卒業生の未来への期待を述べました。

“Militärische Einsätze und Völkerverständigung”。時代を超えた将校の責務です。

目標だった留学は到達点ではなく、家族と私の引き続く人生にも様々なきっかけを与えました。今後もドイツとの関りは大事にしていきたいと思っています。



ドイツ連邦軍指揮大学本館



図上戦術



現地戦術



修了式でのスピーチ



指揮大学からの招聘

ドイツの街紹介

Münchenから南下してアルペン街道の街へ

OberammergauとGarmisch-Partenkirchen、他

ドイツを愛し憧れる人にとっては、どの町にも魅力あふれる街並みがあります。今回は、コロナの前に日本から直行便でミュンヘンへ、数日滞在し、それから南に位置するアルペン街道の美しい幾つかの町に向かい、オーストリアのチロル地方を経由してザルツブルクに滞在し、帰り道は市川市とパートナーシティのローゼンハイムにも泊ってミュンヘンまで走った、2週間のドライブ旅で訪れた町の内から、その一部を紹介します。

バイエルン州の州都ミュンヘンは、人口約150万人、ドイツで3番目の大都市です。そこにはバイエルン州の南部独特の大きな雰囲気と、大きなビアホール、いくつもの歴史ある建物の美術館、博物館、等があり、思い出される方も多いでしょう。

中央駅のすぐ南のホテルに泊まり、定番の新市庁舎、レジデンス、数々の教会、BMW博物館、他を見学し、そして、ホーフブロイハウスの大ジョッキビアを楽しむ、3日間ほど街の空気に触れました。その後、駅の近くでレンタカーを調達し、昔の駐在員時代には各地を走り回っていたとは言え、日本とは真逆の左ハンドル右側通行に緊張しつつ目的地に向けスタートしました。

ミュンヘンから西南約70キロにあるフュッセンの街には、日本人にもよく知られているロマンティック街道のフィナーレを飾るノイシュバンシュタイン城があります。城の下小さなホテルに泊まり、目の前に白亜の城の姿を見上げ、中世に戻った様なひと時を過ごし、翌朝、オーストリアからの旅行者に城をバックに写真をお願いし、情報交換の後に、次はアルプスの山々に囲まれた人口約五千人の小さな村、オーバーアーマガウを目指しました。この町は10年に一度、村人が総出で約400年前頃から世界最大級の「キリスト受難劇」を上演することで世界的に有名です。当協会では過去に山田徹雄氏を迎えて「受難劇上演と観光」と題した新春講演会（2019年1月、Eiche117号）が



ミュンヘン新市庁舎前



ミュンヘン露店花屋さん



ホーフブロイハウス前



ノイシュバンシュタイン城を背景



オーバーアーマガウの街並み



オーバーアーマガウ入口のGS

開催されています。また、コロナ直前の2020年には研修旅行先の候補地として準備を進めたこともありました。

ここから更に南には、静かな中に美しさも備え、1930年代に冬季オリンピックが開催されたガルミシュ・パルテンキルヘンの村があります。家々にはフレスコ壁画が描かれていて、アルプスを背景に歴史を感じる家並みを見ることができます。この村から登山鉄道とロープウェイでドイツ最高峰のツークシュピッツェ山の山頂（2962m）付近まで登ることができます。更にバイオリン工房の多いミッテンヴァルトの村を通り、美しく自然な山間の道を南下し国境を越えると、そこはオーストリアのチロル地方の州都であるインスブルックでした。旅の夢はすべて叶うものではありませんが、出来れば、現地を自分の目で見て触れ合う素晴らしい体験を何度でもしたいものです。

（常任理事：志賀 久徳）



ガルミシュパルテンキルヘン



チロル地方に向かう道



インスブルックの街並み、チロル

ヴィヒ2世は、空想上のフランス宮廷貴族の人々との会食用の食事をこの食卓に用意させ、一人での食事を好みました。ヒアナイスが記した記録から、

現実逃避するルートヴィヒ2世の人物像が垣間見えてきます。回顧録に加え、ルートヴィヒ2世が建てた各城の食卓や宮廷料理に使われた食材、ルートヴィヒ2世が愛したワイン等についてドイツ観光局広報マネージャー大畑氏によるコラム、皆川山梨大学教授によるルートヴィヒ2世の世界観の背景に関する解題、また、実際の献立表のメニューも収録されています。ルートヴィヒ2世とその時代、当時の食文化・歴史に関心のある方にお勧めの一冊です。

出版に先立ち、3月16日にドイツ文化会館内にあるレストラン「マルツァイト」で催された出版記念イベントに参加しました。ヴァーグナーの歌曲の調べと共に、訳者の森本氏より、出版に至った経緯についてのお話に続き、コラムを担当された大畑氏によるトークがありました。本中に登場するルートヴィヒ2世が実際に食したメニューの中から、一部再現されたお料理がドイツ大使館公邸料理人小林シェフによって振舞われ、店内は当時の宮廷世界が感じられる華やかな雰囲気となりました。

（常任理事：本間実里）



ルートヴィヒ王が好んで過ごした
シャッヘンの御用邸



鹿のロースト

新入会員紹介

はじめまして、古川謙也と申します。

コロナによる感染拡大状況が落ち着き、暑さも和らいだ昨年秋に、「日常」を楽しみたいと妻を連れ、「いちかわドイツデー」を訪れました。そこで偶々千葉県日独協会の展示を拝見していたところ、事務局長の植松様や副会長の木戸様ほかスタッフの方々から丁寧に対応いただきお話ししたのが縁で、この度入会いたしました。



学生時代には少しドイツ語も勉強し、ドイツ文化に触れてはいたものの、社会人となってからはドイツ談義のできる仲間は、ほぼ皆無。サッカーワールドカップの応援では、いつも寂しい(?) 想いをしておりました。今回の入会を機に、講演会への参加や会員同士の交流をしていきたいと思います。ビール片手にいろいろな世代の方々とのドイツ談義ができるのが楽しみです。どうぞよろしくお願いいたします。

書籍/Buch

「ルートヴィヒ2世の食卓—メルヘン王に仕えた宮廷料理人の記憶」

教育評論社 テオドア・ヒアナイス (著)、森本智子 (訳) ¥2,200 (税込)

バイエルン国王として1864年から1886年まで在位したルートヴィヒ2世は、リヒャルト・ヴァーグナーの音楽に心酔し、ノイシュバンシュタイン城、リンダーホーフ城、ヘレンキームゼー城等の建築に破滅的浪費を繰り返したメルヘン王として知られています。本書は、1884年から1886年までルートヴィヒ2世の宮廷料理人として仕えたテオドア・ヒアナイスによる回顧録です。本書の表紙には、ルートヴィヒ2世が長い期間を過ごしたリンダーホーフ城の宮廷内の食卓が描かれています。ルート



今後の予定

■青壮年部ドイツ歴史研究会オンライン講演

日時 2024年7月28日 18:00-予定
オンライン講演

内容 「オーストリアの民族意識（仮称）」
●詳細は、別途、ご案内致します。

会員情報

個人会員	片山 麻里さん	松戸市
	武井 曜子さん	松戸市
	橋本 仁さん	浦安市
	橋本 幸子さん	浦安市
	南木 雅弘さん	町田市
	風間 康宏さん	江戸川区

法人会員 医療法人 同和会 千葉病院、
社会福祉法人清和会、(株) 京葉ビル管理、
(株) 和幸電気工事、
バイエルンストゥーベ by ダンケ

編集後記

私がこのDie Eicheの編集を任されて最初にリリースしたNo.113号（2018年）から、本号（No.148）35号までリリース、6年経過しました。この間の協会活動も試行錯誤を行い、着実に活動内容を進化させています。当協会に入会なされる方も着実に増加傾向にあり、うれしい限りです。今後は、千葉県日独協会の会員の皆様とより多く活動の場を通じてお互いに知り合い、ドイツに関する知見の交換を深めることができればと思っています。勝負